平成26年産みえの麦生産改善技術情報　第1報

現在の生育の状況と気象予報

本年産麦は、播種時期以降、気温が低く推移しているため生育は遅れています。1か月予報（1月17日名古屋気象台発表）では、**今後1か月間の気温は平年並または低い、降水量は平年並または少ない**と予想されています。

３～６葉期の重点対策

この時期は穂数の確保に重要な時期で、「肥切れ」させないことが茎数確保に重要です。

基肥として施用された窒素成分は、麦に吸収される以外に降雨により流亡してしまいます。

本年の播種後（11月下旬～1月上旬）の降水量は平年並となっています。

このことから、

基肥の降雨による流亡は多くないと予想され、肥効は持続すると考えられます。

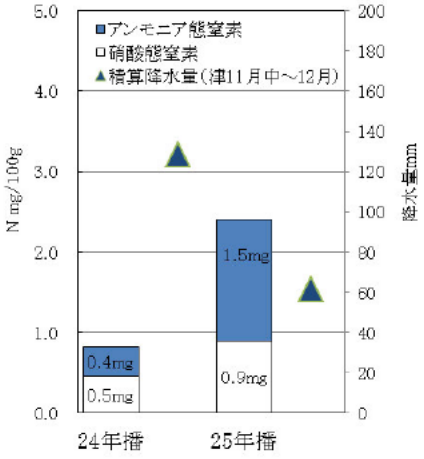

図1　小麦圃場における降水量と土壌中の窒素残存量
播種11月中旬、窒素残存量測定：1月上旬（松阪市）

○ 播種が早く、生育が旺盛な圃場や、緩効性肥料を施用した圃場において葉色の低下が見られる場合は「つなぎ肥」の施用が必要です。

時期：1月下旬～2月始め

施用量：窒素成分で2kg／10a程度

○ 上記以外の圃場では、1回目追肥を下記の通り施用します。

時期：2月中下旬

施用量：窒素成分で2～3kg／10a程度

○ 例年、湿害が発生しやすい圃場では、降水量が少なく圃場が良く乾燥する1～2月に、明渠を追加施工、整備し、排水性を確保します。

平成２６年１月２２日

三重県産麦生産改善技術対策会議